

2023 年インドネシア植林 ボランティアツアー報告書

2019 年 12 月 8 日（金）～14 日（木）



今を生きて、永遠の生命をつなぐために、木を植え続けています。

植林で拓く地球とあなたの未来

みんなで木を植えましょう

I Love Earth I Love Peace



木を植えている人は無心に大地と植林する木に向かい合っています。

ただ、元気に育ってほしいと願って取り組んでいます。

バリ島にて植林を始めて、今年で 16 年目を迎えることができました。おかげさまで、植林を始めた時とは全く違った景色が広がっています。多くの個人の皆様、企業の皆様のご支援によりこの活動が維持、継続できていることに心からの感謝とともに自然の再生力に改めて感謝です。

バリ島の観光地の一部であるバツール山の火山爆発被災地は国内外に広く知られた土地で、被害に遭った土地の修復を願う人はたくさんおられるはずです。

火山爆発により真っ黒い大地になってしまった現場に立つと様々な思いがめぐります。

この地域で生活をしていた人たちはどのように生活をしてこられたのだろうか？

最初の火山爆発から 159 年間、わたしたちが植林を始めるまで、人の手では、なにもなされず、自然の再生もない状態のままで放置されていたのです。

誰も手を入れなければ、自然の再生力だけでは植生が戻ることは期待できないことは明白です。

こんな不毛な土地で植林を 16 年間継続してこられたのは、この活動を支援していただいた多くの皆様のおかげさまです。

世界中から訪問客の集まるバリ島で、一人でも多くの皆さんに参加していただいて、植林を進めることができれば、世界は平和で、自然も再生すると考えて「世界平和の森づくり」と名付けて 2007 年から取り組んでいます。平和で安心、安全な世界を植林で！！

植林ツアーでできたこと

<12月8日(金)>

■11:00 成田空港発 GA881 便にて出発、インドネシア/バリ州/デンパサール空港へ向けて飛び立ちます。昨年から就航を開始した東京からマナド経由、バリ行き便で初めて行きました。



■17:45、ほぼ予定どおりにデンパサール到着しましたが、入国手続きのあと手荷物検査の手続きのシステムが、デジタル申告を自分で入力するシステムに変更されていて、とても時間がかかってしまいました。

❖飛行機の到着から、なかなか入国しないので、出迎えのガイドさんが心配して様子をうかがいに来てくれるほど時間がかかってしまいました。

今回はこれまでのようにあわただしく行動しなくていいように、この日は夕食後、デンパサールのホテルへ 1 泊するというスケジュールだったので余裕をもって対応できてよかったです。

■宿泊 ホテルアイビススタイルデンパサールに宿泊



※このホテル＝アイビススタイルデンパサールは、フランス系のホテルグループのホテルですが、環境に優れた配慮をしたホテルで、インドネシアの活動のパートナーだった故ルスタムエフェンディーがアコールグループの支配人が友人だった関係で、インドネシアの植林に協力してくれているホテルで、利用させていただいています。

■12月9日 AM9:00 ホテル発バツール湖畔のホテルセガラ着 12:00^{*)}

ホテルに着いてサラスワティ大学の日本語学科の学生達と合流。昼食後、準備をして 2015 年の植林地の状況をみながらトレッキング。約 2 時間、2015 年に植林した木々の状況を見ながら、こんな厳しい環境でよく育っていることに驚きと感謝の気持ちで一杯です。3 年ほど見られなかった植林現場をみて植えた木々を育てられている自然、大地に改めて偉大さを感じさせていただきました。

はじめて現地を訪問した人たちには、こんな火山爆発の被災地に植えた木々が元気に育っていることを見て、感じていただければと改めて思います。



2017 年に植林した溶岩の堆積した台地に育つ植林木です。この木々が今後 10 年 20 年経てば木陰をつくるほどに成長し、この荒廃した大地を多様性豊かな森に育ってくれると期待しています。

ここがまた火山爆発したら？先のことはわかりませんが、それはそれで自然に従うしかないと考えています。



2007年に植林を始めた土地を俯瞰した写真です。左寄りの中央部が茶色く見えるのは、火事により被害を受けたところです。しかし、アンプブという樹種は、葉が火事により被害を受けても、3カ月ぐらいで青々とした歯が繁ります。一般的な山火事とは違います。

■以前から植林活動が行われているバトゥール山の2009～2012年植林地をトレッキングにより植林木の成長状況の確認を行いました。このエリアは私たちが植林に取り組むまで159年間放置されてきたエリアでした。火山爆発から159年たって、岩石は風化して砂を育み、草丈の短い草を育てていましたが、木と言える植物は皆無でした。自然による回復の困難さを物語っていました。



植林開始から16年
荒廃大地はこんな姿に



植林してよかったと思える
瞬間です。



※かつては人が生活することができない不毛の荒廃地だったようですが、根気よく植樹を継続することで徐々に植林木が根付き、大地が安定し、農業が可能となり、地元民の生活が復活されていることが確認できました

■15:30 バトゥール山の視察を終え、ホテルに戻り汗をながして休憩。

夕食前に、学生たちによる『日本語スピーチコンテスト(^)』まえもって植林に対する自分が今感じていることを、日本語でスピーチしていただきました。

我々日本人が審査員となり、①日本語②意見③表現力について審査をします。上位3名には素敵な景品をプレゼント。また、ツアー参加者が日本から持参したお土産を学生全員にプレゼントさせていただきました。

※学生スピーチの中で最も私の印象に残った言葉

「私たちは水を飲む。空気を吸う。環境の良し悪しは、私の体の良し悪しに直結する。

私達の人生を愛するように、私達の自然を愛してください。」

(デタさんのスピーチより)

→環境問題は世界規模であることや、現在の様々な異常気象の最大の原因は森林減少だから植林の推進

→森林は1000年前の1/5に減少、そして特に熱帯雨林の減少が気候変動を招いている現状

→科学や技術の進歩だけでは得られない、自然と共に生きるという人間の意識・社会の価値観の転換

→熱帯林再生活動の成果報告 などなど



★スピーチコンテスト上位3人を表彰

今年は、4年生が多く参加してくれて、それぞれが環境認識の高い内容のスピーチで感動しました。

甲乙つけがたいのですが、1～3位の学生を表彰、日本からツアー参加者の持参した品をプレゼントさせていただきました。（写真右端は、指導教授の Betty 先生）



❖植林祭 2023 年 12 月 10 日

12 月 10 日 日曜日、2023 年植林祭開催：

■12 月 10 日 8:00 「バリ植林祭 2023」メイン会場に到着。

植林活動のために地元の各種団体や学生が約 600 名参加(〇)/会場には DJ ブースが設けられイケイケの MC が会場を盛り上げています。また、ペットボトルのゴミを出さないよう、マイボトルへの給水サーバーが設けられていて、地元住民の環境への意識は変化して来ている。地元民の植林への意識を高めるために 2009 年から始めた植林祭はしっかりと成果が現れ、地元住民に根付きながら植林文化が定着しているように感じます。

■最初の火山爆発から 159 年経過、隣接するバツウール湖の水位が 2m も低下して、島民の水瓶の危機となり、2006 年植林協力の依頼あり、2007 年から植林を始めました。

植林するには厳しい土壌条件、気象条件で試行錯誤のすえ現在までに 138000 本の植林[230ha = 東京ドーム 54 個分]を完了。森が戻り⇒水位も 1m ほど回復し、周辺地で農業も営まれ始めています。

写真の子が 20 歳になるころには森として繁っている





ツアー参加者と学生の記念写真

■植林ポイントには現地の方々により、苗と水を事前に運んでくださっており、さらには硬い溶岩石を砕いて穴を掘り、その穴に土と堆肥を入れるところまでを現地の人達により準備、ツアー参加者は苗を植えるだけという状態まで事前準備が行われていました。（この準備はとてつもなく重労働だと思われます。感謝）



植林開始前集合打ち合わせ風景



大学生たちの活動、真剣・真面目に取り組む



大学生と鹿養さんご夫妻



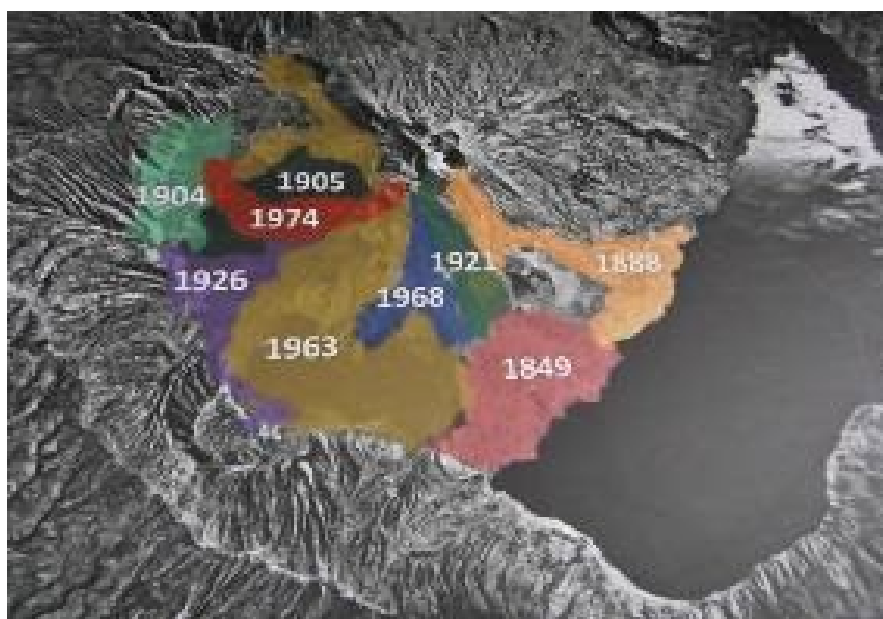
植え替えに集中、無心で取り組む



500本の植え替えを終えてひと休み

1949年の被災地から始めて
1963年の被災地も植林
2023年末植林分の累計は
138,000本となりました。
再生できた面積は約230畝
東京ドーム約51個分に相当
します。

峠の上から、真っ黒く広がっ
ていた大地は、少し緑がか
って見えるようになってき
ています。



被災したエリアは2000ヘクタールあり、まだまだですが、継続こそが自然の再生に役立つと信じて取り組んで
ゆきたいと考えています。

地球上で健康に生き続けるためには植生を回復が不可欠です。1849年最初の火山爆発から
159年経った2007年から火山被災地の再生植林を開始

災害により壊れた自然は、自然の再生力だけでは回復が難しく、人が再生に参加することで再生
のスピードが速くなるということを実感しています。参加・ご支援のすべての皆様に感謝！

緑豊かな地球を未来に！



「チュラマ」をはじめて植える

「チュラマ」という植物は、初めて目にする樹木でした。

林業環境省からの推薦で今回、初めて植林をしました。苗は地元の人達の手で育成されていて、高さ 60 cm程の大きさでした。葉っぱは細い針葉でこんな厳しい環境で育つのか少し疑問に感じましたが、地元の人たちの希望で植えるのだから大丈夫だろうと考えています。

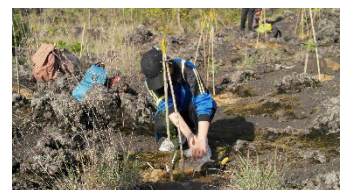
来年、訪問した時にどのように育っているか、訪問の楽しみが増えました。

インドネシアに自生する常緑樹で、学名は「*Elaeocarpus angustifolius*」オリーブ科の植物で、インドからニューカレドニア、オーストラリア北部に分布しているようです。

この植物は、直径約 1.5～3cm の青紫色の果実をつけます。この植物の果実の種子は、熱心なヒンドゥー教の人たちの祈りのビーズとして広く使用されているそうです。地元の宗教とつながりがあるようで納得！



チュラマを植える



※地元協力者の Pada さんが初めて、息子さんを連れてきてくれました。彼は、植林前の準備にも参加し、この土地の植林を引き継いでくれる若い人材がいてうれしい

NPO 法人アジア植林友好協会

info@agfn.org <http://www.agfn.org>